

地域資料で見る日露戦争 ～役場記録を中心に～

平成元(1989)年、長岡京市では昭和20(1945)年に起きた神足空襲の日(7月19日)を“平和の日”と決めました。今年はその制定から20年目にあたります。今回は、平成17年に終戦から100年を迎えた日露戦争を、当時の役場日誌を中心に紹介いたします。この地域の人々は一体どのようにこの戦争と向き合ったかを見ていきましょう。

展示期間：平成21年7月2日(木)～9月30日(水)
* 図書館休館日は除く。* 展示期間中、一部展示替えを行います。



日露戦争のはじまり ～海印寺村役場では…～

日露戦争は、日本とロシアの間で朝鮮と満州の支配をめぐる競争が原因で起きました。日本はロシアと交渉を重ねましたが、結局打開点を見出すことはできず、明治37(1904)年1月の御前会議で開戦を決定しました。翌2月8日以降、陸軍先遣部隊の仁川上陸や、旅順港外にあったロシア艦隊への攻撃を経て、10日、正式に宣戦布告をしました。

この長岡京市域の海印寺村でも、2月5日に発令された作戦開始命令を受け、あわただしさにつつまれました。6日の真夜中午前3時過ぎ、この地域を管轄する師団である大阪師団(第4師団)の動員令が報じられ、村長、助役、書記がただちに役場へ出勤しています。午後からは、駐在所の巡査が在郷軍人名簿を書き写すために村役場を訪れており、開戦以降、所轄の乙訓郡役所との照会・回答事務など、村役場の事務量は増大していきました。



海印寺村役場文書に記された日露戦争 (教育委員会蔵)

海印寺村は、明治22(1889)年に奥海印寺・下海印寺・金ヶ原・浄土谷村が合併してできました。村役場は、大正12(1923)年3月まで常光寺にあり、昭和61(1986)年、改築のために取り壊したさい、明治の役場文書を含め約1200点の文書が発見されました。

海印寺村の保存文書としては明治34年から明治38年までの4年分の記録が残っており、その中には日露戦争時の役場の様子を伝える文書が含まれています。





地域の支援体制 ～役場と村の活動～

日露戦争では、当初の予想を超える費用がかかりました。その膨大な戦費をまかなうために、全国に国債がほぼ強制的に割り当てられました。海印寺村にも 4000 円が割り当てられ、その割り当てをめぐって「各区長・村会議員・大地主協議会」が開かれたことが、役場文書に記されています。

このような地域での支援は尚武会しょうぶかいと呼ばれる組織が中心となって行いました。尚武会とは、徴兵軍人への激励とその家族の援助のために、府下各郡において創られた組織で、海印寺村にも乙訓郡尚武会の支会がありました。国債募集にも尽力したほか、出征兵士に慰問状や物品を送付したり、残された家族への慰問活動を実施するなど、出征兵士とその家族に対する援助も行いました。支会長が村長であったこともあり、事実上、村役場の主導で行われていました。

[※当時の 1 円＝約 1392 円(平成 20 年現在)。日銀のホームページより算出]



日露戦争開戦時の役場のようす

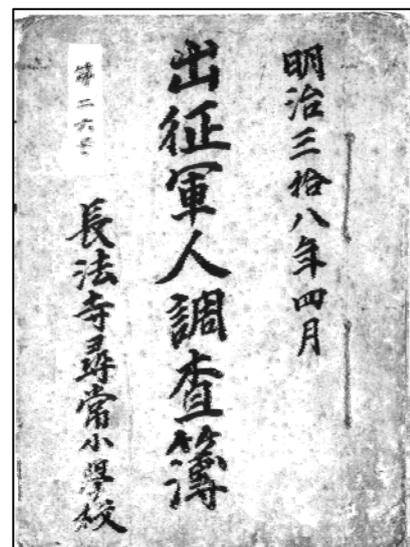
海印寺村役場文書には、日露戦争開戦(明治 37 年)から約 1 年間の日誌も残されています。徴兵事務など戦争に関わる事務は、通常の一般事務に加えて押し寄せてきたため、役場は多忙を極めました。当時の出勤簿によれば、日曜日の欄に「事務繁忙ニ付出勤」という記事もあります。



日露戦争の終結と市域の被害

戦争は、奉天占領後、日本海海戦での勝利を契機として、アメリカの仲介で明治 38(1895)年 9 月 5 日に日露講和条約(ポーツマス条約)を結んで終わりました。日本は当時にして約 19 億 9000 万円の戦費を費やし、損害は戦死者約 8 万 4000 名、戦傷者約 14 万 3000 名にのぼりました。長岡京市でも、海印寺村で 7 名、乙訓村で 8 名、新神足村で 4 名の方が戦死しています。

村役場は尚武会と協力し、村をあげての葬儀(村葬)を執り行うほか、遺族が賞賜金を受け取るための事務手続きなどを行いました。



出征軍人調査簿(明治 38 年)

海印寺村・乙訓村の日露戦争出征者数・戦死者数・兵糧・等級・付属隊・徴集年月などが分かります。